

あとがき 韓国社会の変化に学ぶこと

1990年代の数年間、韓国の番組制作会社で働いていたことがある。オフイスは江南駅の近くにあり、30代後半の社長は運転手付きの外車に乗るほど羽振り良く……見えたのだが、実は真逆で火の車。いつも資金繰りに追われていた。

彼は追い詰められると、逃げるように日本に行った。2泊3日の東京出張は、ホテルでテレビを見まくり、書店で本を買い漁り、秋葉原に行つて中古の撮影機材を物色する。

彼は帰つてくると毎回、見違えるように元気になっていた。

「ジュンコサン、日本はすごいよ。1回行けば番組企画が10本はできる。わはは……」

たしかに韓国のテレビ局はその頃、政治分野は別として、芸能・文化・教養系などはもれなく「日本に学べ」ムードだった。中には日本の劣化コピーのような番組もあり、それらは「日本のパクリ」と叩かれもしたが、そもそもオリジナルは米国だったとか。「水は低きに流れ」というやつだろうか。

うちの社長はもつと真剣に日本から学ぼうとしていた、が、如何せん資金がない。せつぱつ
まると秋葉原で買った中古機材を同業者に売りつけたり、荒唐無稽なアイデアを出したりし
て私を怒らせた。

「ジュンコサン、これを輸入して一儲けしよう。すぐに日本に電話してください」

目の前に出されたのは「太田胃散」の丸い缶。「うちは番組制作会社ですよ。製薬会社じゃ
ない！」と声を荒らげたら、とても驚いていた。

「わかります。あの頃の日本はキラキラしていました。目に入るものすべてが魅力的だった」
同じ頃、研修で日本に行ったテレビ局の新人プロデューサーは、まずは自動販売機のジュー
スの種類に圧倒されたと言っていた。

「これを全部飲んでみるまでは帰れないと思いました」

そこまでしなくても、と思うほど彼らは一生懸命だった。

「追いつきたいという以前に、ただ、ただ、日本が羨ましかったですね」

あれから30年、今は日本から見た韓国がキラキラしてまぶしい。世界のサムスンが牽引する
デジタル先進国、人々を魅了するK-POPや韓国ドラマ、国際映画祭のレッドカーペットで
も今や彼らは常連である。それだけではない。環境や人権などの分野でも、社会のイノベーシ

ヨンはどんどん進んでいる。驚いたのは生ゴミのリサイクル率が90%を超え、ついにドイツを抜いて世界1位となったというニュースだ。河川の浄化も進み、鳥や魚が戻ってきた。家の近所を走るコミユニティバスもいつのまにかEV車に替わっていた。

「今は韓国のほうが先進国ですよ。学ぶことばかりだと思います」

そんなふうと言われることも多いのだが、あまり端折はしよらないほうがいいと思う。韓国だって一朝一夕に今のような発展をなし得たわけではない。人々は私たちが想像する以上の努力をし、また犠牲も払ってきた。最近になって、自分が経験した過去の話をするようになったのは、そこから今にいたる「変化の過程」を知ってほしいと思ったからだ。

※

本書は2022年1月に刊行された『韓国カルチャー 隣人の素顔と現在』の続編にあたる。韓国のドラマや映画、あるいは小説などを通して、韓国の豊かな文化、カルチャーを知る。前著では主に人々の衣食住にまつわる生活文化や、家族や親族と友だちとの関係などについて、また字幕では伝わりにくい韓国語のニュアンスなどについて書いた。

基本的なコンセプトは同じなのだが、今回は歴史や社会の変化に重点を置いている。それも

あって、前回に比べるとドラマよりも映画の比重がかなり増えている。変化の過程を知るために、あえて旧作の中からも重要な作品を選んだ。新書化にあたって大幅な修正加筆をした章もある。

たとえば第四章では朝鮮戦争を知るために、時系列に沿って『ブラザーフッド』『戦火の中へ』『スウィング・キッズ』『高地戦』という4本の映画を選んだ。1950年6月の開戦から1953年の休戦協定まで。朝鮮戦争の歴史が一通りわかるようなラインナップにしたのだが、それに加えて重要だと思ったのは映画の制作年である。

最初の『ブラザーフッド』が公開された2004年から『スウィング・キッズ』の2018年までに、14年間が経過している。4本の映画には作られた時期によって、監督の問題意識に違いがある。

2000年代初めには、北朝鮮兵を人間的に描くこと、韓国側の過ちも認めることが、最大のチャレンジだった。その14年後には、なんと捕虜収容所でタップダンスを踊る北朝鮮兵が登場している。背景には時代と国民意識の変化があり、そこが非常に興味深い。

また、第六章の『子猫をお願い』（2001年）と第一二章の『別れる決心』（2022年）で

は、日本ではあまり知られることがない韓国のマイノリティー、在韓華僑と中国朝鮮族の歴史にふれた。二つの映画の公開時期には20年余りの開きがあり、また登場人物も同じ在韓中国人ながらオールドカメラとニューカメラの違いがある。

実は『子猫をお願い』の中にも、ニューカメラの人々は登場していた。港に停泊する船から人々があふれ出るシーンで、チョン・ジエウン監督は主役のペ・ドゥナに、「あの人たちはどこから来てどこに行くのかな？」とつぶやかせている。

韓国社会はその後も彼らとの関係を上手に構築できずにいる。それでも20年の間には何度も法改正が行われ、着実に前には進んでいる。日本も見習いたいところがたくさんある。

チョン・ジエウン監督は2022年『猫たちのアパートメント』というドキュメンタリー映画を発表しており、その中に登場する「韓国はアパート共和国」という台詞をヒントに書いたのが第一章である。ここでは韓国の経済発展の土台となった不動産開発、その象徴である「江南開発」についてふれた。

この章で私は「団地映画」という言葉を使った。韓国にそういうジャンルがあるわけではないが、『ほえる犬は噛まない』（2000年）と『はちどり』（2018年）という二つの傑作をつなげてみると、韓国社会における居住環境の変化がいかに人々の意識を変えたかが浮き上がる。

そこには多くの葛藤と苦悩があり、家族や個人の犠牲があった。それでもやはり新しい船を動かせるのは古い水夫ではない。世代交代と価値観の変化、老いては孫に従ったのである。

変化の速度についていけずに、落ちこぼれたのは高齢者だけではない。必死に食らいついたが大切なものを失った人たちもいた。

第三章でとりあげた『マイ・ディア・ミスター〜私のおじさん〜』と第八章の『私たちのブルース』は、人々が置き去りにしてきたものを取り戻そうとするドラマである。さらに第五章の『リトル・フォレスト 春夏秋冬』は日本映画のリメイクだが、プロデューサー自身が個人的につらかった時期に癒やされた作品であり、「ぜひ韓国版を」とイム・スルレ監督に懇願したのだという。そして私自身は昨年につらかった時期、この韓国版に救われた。

そもそも隣国同士というのは特別な存在だと思う。古代から人も流れ、文化も流れた。水は高いほうから低いほうに流れるだけではない。水は小さな裂け目からも染み込み、乾いたところを潤していく。水は交わり、ときには大きな流れを作り出した。

第一二章の補足になるが、パク・チャヌク監督の『オールド・ボーイ』が2004年にカンヌ国際映画祭でグランプリを受賞したとき、流れが合流したことの喜びを感じた。

あのとき、韓国社会は韓国映画が国際的な評価を得たことで大いに盛り上がった。特に主人公のキャラクターはテレビのバラエティ番組にはうってつけだった。もじゃもじゃ頭の男に出前の餃子のパロディなどが、それまでハードルの高かった「カンヌ的な映画」を一気に身近なものにした。

それと同時に映画の原作が日本の漫画であることも注目された。韓国で日本文化は特別な意味を持ち、1990年代までは日本映画の一般上映も許可されなかった。漫画やアニメも日本製であることが隠されて流通していた時期があり、それを後で知った韓国の人々は傷ついた。

パク・チャヌク個人はそれを超えた人であり、他国の監督らと同じように日本漫画の要素を楽しみながら作品に取り入れていたが、韓国社会全体には「後ろめたさ」のようなものが残っていた。

そんな人々は、彼が真正面から日本の漫画を原作にし、それをもって国際的な賞に輝き、原作者たちからも絶賛されたことに感激した（日本での試写会で映画を見終わった瞬間、原作者の土屋ガロンはガッツポーズをしたという）。韓国は日本を超え、その呪縛からも自由になろうとしている。すでに絶版になってしまったが、『もう日本を気にしなくなった韓国人』（2007年）は、当時の韓国社会の変化に感激して書いた拙著のタイトルである。

古今東西、隣国同士は政治的に対立しながら、時に為政者はその文化の流れさえも止めよう

とした。帝国日本にいたっては隣国の文化そのものを抹殺しようとし、自国文化もまた破壊した。パク・チャヌク監督の『お嬢さん』（2016年）に登場する日韓の女性は、あの野蛮な時代につぶされかけた「文化」そのものだったと思う。

※

2023年2月末、成田空港から仁川空港行きの飛行機に乗った。パンデミックで入国制限がきつかった頃に比べて、時間とお金さえ融通できれば、日韓は気軽に行き来できるようになった。ちなみに日本では韓国人が、韓国では日本人が、互いに訪問客の1位になっている。

飛行機で隣に座った若い韓国女性は、仁川に到着するなりお母さんに電話していた。

「本当に幸せな時間だったんだから。食べて遊んで食べて。うなぎ丼も食べたし、ケーキも食べたし……もう幸せすぎ……このまま日本に飛行機で戻りたいぐらい、本当に美味しくて、幸せだったんだから……」

春休みを利用して日本留学中の友人を訪ねたという。何度も「幸せだった」と繰り返す娘の元気な声を聞くお母さんもまた幸せだろうし、そう思ったら私もなんだか幸せな気持ちになってきた。

それにしても、ドラマや映画についての解説をネタバレなしで書くというのはスリリングな仕事だった。作品を見ていない人にとっても、読み応えがあるようにと、そこは取材やインタビューで補った。時には熱く感想を語り、時にはボロクソに批判しながら、取材に協力してくれた韓国や日本の友人たちに感謝したい。今回も集英社新書プラスでの連載と新書化にあたって、担当編集者の金井田亜希さんには本当にお世話になった。どうもありがとうございます！

2023年3月3日 釜山にて